

<論文> 『万葉集』六五五番歌「邑礼左変」再論

著者	間宮 厚司
雑誌名	日本文學誌要
巻	54
ページ	23-29
発行年	1996-07-13
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019891

『万葉集』六五五番歌「邑礼左変」再論

間宮 厚司

はじめに

不念乎^{オモハヌヲ} 思常云者^{オモフトイハバ} 天地之^{アメツチノ} 神祇毛知寒^{カミモシラサム} 邑礼左変^{ムラサキサハヤリ}

(万四・六五五)

右の歌の結句「邑礼左変」は、難訓箇所で定訓がない。

この結句に関して、既に筆者は、『万葉集』の「邑礼左変」の訓みと解釈」(『国文学解釈と鑑賞』・至文堂・平成五年一月号)の中で、「国こそ境へ」の新訓を発表している。

しかし、紙幅の関係(四百字×一二枚程度)により、当時充分に論じ切れない点がいくつかあった。また、論証の過程で、部分的に訂正する(最終的な結論に影響はない)ところも、今回出てきた。

それと、伊藤博『万葉集釈注・二』(集英社・平成八年二月刊)に、拙論を紹介して頂いたものの、「しかし、なお訓義未詳とするのが無難であろう」(五七四頁)と結論づけられ、採用されるまでには至らなかった。説明不足の点があったのかも知れない。

以上が再論の動機であり、本稿を書く意義は既発表論文の補遺と若干の訂正を行うことにある。

一

論述の都合上、先ず、「邑礼左変」の下二文字「左変」の訓み方から考えていくことにする。

「左」字は音仮名「サ」として、『万葉集』に六百余りの使用例があり、六五五番歌に続く次の歌にも例が見える。

言乃名具左曾^{コトノナグサヤツ}

(万四・六五六)

よって、「左」字を、「サ」と訓む。

「変」字を音仮名「へ」に使用した例は、『万葉集』には皆無である。また、これは中国語の原字音に照らしても、「変」字は上代特殊仮名遣いの「へ」の乙類音節に当てるのにふさわしくないもので、例えば、「左変」を助詞のサへで訓むことは、サへの「へ」が乙類なので困難である。すると、「変」字は訓仮名として訓む方向で考えざる

を得ない。そこで、平安末期の漢和辞書『類聚名義抄』を見ると、「変」字にはカフの訓がある。ならば、「左変」はサカフと訓める。サカフ（境・界）とは、「（間に境界線を置いて）境をつける・分け隔てる・区画する」意を表す四段他動詞で、語の構成は、「サカ（割・裂）＋フ（接尾語）」と考えられる。

この動詞サカフは、『万葉集』に連用形サカヒとして、一字一音の仮名書きの表記ではないけれども、一例見られる。

大王之 界賜跡

（万六・九五〇）

これは、「大君が境界をお決めになると」と解釈される。この「界」字を、『類聚名義抄』で調べると、動詞サカフと名詞サカヒの両訓が付いている。そして、『万葉集』には、「境」と「界」の文字で表記された「境界」を意味する名詞サカヒも、一例ずつある。

唐能 遠境尔

（万五・八九四）

遠津国 黄泉乃界丹

（万九・一八〇四）

ここで、「左変」表記から導かれる可能な訓について、確認しておきたい。サカフは四段動詞であるから、その活用の仕方はサカハ（未然形）・サカヒ（連用形）・サカフ（終止形）・サカフ（連体形）・サカヘ（已然形）・サカヘ（命令形）である。その語頭のサは、「左」字によって表記されているので、それに下二段動詞カフの活用形、つまり、カヘ（未然形）・カヘ（連用形）・カフ（終止形）・カフル（連体形）・カフレ（已然形）・カヘヨ（命令形）を組み合わせることになる。そうすると、上代語（大和方言）の文法や音韻に背反しない形は、サカフ（終止形）・サカフ（連体形）・サカヘ（已然形）の三つの活用形に絞られる。なお、命令形サカヘの「ヘ」は上代特殊仮名遣いの甲類の「ヘ」であるのに対し、カフの未然形カヘと連用形

カヘの「ヘ」は共に乙類である。したがって、命令形サカヘは仮名遣いとなるので、除外される。ただし、已然形サカヘの場合は乙類の「ヘ」であるから、仮名遣いの点で矛盾しない。

二

続いて、「邑」字の訓みを考える。

「邑」字は、『万葉集』では人名を表記する際に、オホに当てた次の二例があるのみである。

邑知王

（万一七・三九二六「左注」）

邑婆

（万二〇・四四三九「題詞」）

しかし、「邑」字は、『説文解字』（一〇〇年頃に成立した中国現存最古の字書）に、「邑、國也」とある。また、『類聚名義抄』にもムラやサトと並んで、クニの訓が載っている。そこで、「邑」字をクニと訓む。そして、これは訓として単に可能だけではなく、問題の句を解釈する上で、極めて重要な意味を持つ。なぜならば、「国の境をつけ、分け隔てる」意味を表す「国（を）境ふ」という言い方が文献の上で確かめられるからであり、これは見逃せない。

昔丹波与 播磨 境 国之時

（播磨風土記・託賀郡）

三国をさかふ富士のしば山

（玉葉・一一六六）

七の道の国さかふらし

（新拾遺・一四二一）

すなわち、「邑」字をクニと訓むことによって、先の動詞サカフとの組み合わせで、「邑：左変↓クニ：サカフ」の表現が成立するのである。

一方、「国の境」という連語もある。

国之境

(常陸風土記・香島郡)

国のさかひの内は

(土佐日記・一月九日)

それから、「一」で既に例を示した『万葉集』の「唐の遠き境に」や「遠つ国黄泉の境に」の場合も、サカヒはクニとの関連でやはり使われている。加えて、「邦」字にクニとサカヒの両訓が、『類聚名義抄』に記載されているのは、クニとサカヒとが密接な関係にあることを示唆するものである。そもそも、クニ(国)とは境界線で囲んだ領域を指すのであるから、それが動詞サカフや名詞サカヒと呼応するのうなずける。

三

では、最後に残った「礼」字の訓み方について考えよう。

拙論『万葉集』の「邑礼左変」の訓みと解釈」では、「第一の考え方」として、「礼」字のままで、係助詞のコソで訓み得ると判断し、意見を述べた。今回、それを改めて検討し直してみたい。

上代には動詞の連用形に付いて、「…してくれ…してほしい」と他に読え望む意を表す終助詞コソがあり、『万葉集』には、「欲」「乞」「社」の各文字で表記された例が見られる。

早去欲 ハヤクユキド (万一二・三一五四)
夢所見乞 イメニミミド (万四・六一五)
於妹告社 イモニツグミ (万一〇・二二二九)

『類聚名義抄』でこれら三文字を調べると、「欲」にはネガフ、「乞」にはコフ、「社」にはイノルの訓があり、どれも「神仏などに祈り願う」という似た意味を持っていることがわかる。そして、拙論では

それを根拠に、「欲・乞・社」の三文字は希望を表すコソに当てられ、さらに、それが係助詞コソを表記する場合にも、利用されるようになったのだろう、と書いた。

ところが拙論の時には、大事な点を見落としていた。それは希望の終助詞コソに当てられた「欲」「乞」「社」の三文字のうち、係助詞コソの方にも使用されているのは、「社」字に限られるという事実である。

人社見良目 ヒトミラメ

(万二・一三一)

なぜ、「欲・乞」両字は係助詞コソに一例も当てられなかったのだろうか。それは両文字の表す希望の意味合いの強さに原因があるのだと思う。『万葉集』には、「欲」字でもって形容詞の「欲し」を、「乞」字でもって動詞の「乞ふ」を表記した例がある。

欲君可聞 ホシキミカモ

(万四・五八〇)

若兒乃 乞泣毎 ニギコノミナナクナミ

(万二・二一〇)

「欲・乞」の両字は、本来の字義から希望の終助詞コソには抵抗無く用いられた。しかし、同音の係助詞コソに使うには希望の意味合いが強く出過ぎるために、転用されなかったであろう。

それに比べ、「社」字の方は、『類聚名義抄』に載っているモリ・ヤシロが基本的な訓で、『万葉集』にも例が見える。

名二負有社尔 ナニオヘルヤシロニ
神之社尔 カミノヤシロニ

(万九・一七五二)

(万四・五五八)

要するに、「社」字の場合には神仏にお願いする場所を表すモリ・ヤシロが本来的な訓であって、希望の終助詞コソに当てられたのは、「社」字の拡大用法と考えられる。それがさらに係助詞コソを表記する際にも利用されるようになったのは、「欲・乞」両字よりも、「社」

字の表す希望の意味合いが弱く、ほとんど感じられなかったからに相違ない。そういう理由で、「社」字は係助詞コソへの表音記号化がスムーズ（円滑）に進んだと推察される。

そこで、問題の「礼」字を、『類聚名義抄』で見ると、イノル・ヲガム訓がある。ならば、「礼」字を希望の終助詞コソで訓むのは、「欲・乞・社」の三文字と同様、「神仏などに祈り願う」意が認められるので問題ないだろう。それに、「礼」字の本義は、「守り行うべき作法や儀式・敬意や謝意を表すこと」であり、「社」字の場合と同じ様に希望を表す意味合いは消極的であるから、係助詞コソで訓むことにも抵触せず、これは理論的に成り立つ考えだと思う。

四

拙論『万葉集』の「邑礼左変」の訓みと解釈では、「第二の考え方」として、「社」字を係助詞のコソで訓んだ例が、『万葉集』に数多く見られるところから、「社↓礼」の誤写を想定し、コソと訓む考えを示した。それは以下の根拠に基づく。

現存諸本はいずれも、「礼」字で書写されている。だが、「礼」字と「社」字とは、誤写の範囲内に入る字形だと判断される。

例えば、資料的価値の高い次点（古点より後で、仙覚による新点よりも前につけられた訓点）本に属する『紀州本』に書かれた「邑礼左変」の「礼」字は、「社」字と類似している。

社

それでは、『万葉集』の古写本の他の箇所にも、「社↓礼」の誤写の例があるのかというと、次点本の『類聚古集』に見出せる。

住鳥毛 スミトリモ 意有社 ココロアレバ 波不立目 ナミタザラメ （万七・一三六六）

右の「社」字は、『類聚古集』では次のようになっている。

社

見ての通り、「礼」字を見せ消ちにして、その右側に、「社」字を新たに書き加え、訂正しているのである。

また、同じく次点本の『元暦校本』にも、「社」字と「礼」字とで似通った字形が見えるので、次に示そう。

社

礼

「社」字（万七・一三四四）

「礼」字（万四・五六〇）

このように両字は行書体では、近似していることがわかる。

さらに、「社」字を係助詞コソに用いた例が、問題の六五五番歌と同じ巻四に八例見える。

一日社 ヒトヒレ （万四・四八四）
為社妹乎 タメレイモヲ （万四・五六〇）
珠社所念 タマレイモホユレ （万四・六三五）
人之事社 ヒトノコトヲ （万四・六四七）
相而後社 アヒテノチニ （万四・六七四）

欲見社^{ミツミ}
惜社泣^{ウレシ}
念社^{オモヘ}

(万四・七〇四)
(万四・七三一)
(万四・七三九)

これらの事柄を総合的に勘案すれば、「社↓礼」の誤写を考えるのも決して無理ではない。

五

さてそうすると、「左変」表記は係助詞コソの結びになるから、サカフ（境・界）の已然形サカへで訓むことになるが、「変」字をカへと訓ませた例は、『万葉集』に二例ある。

伊往交良比^{イユキヤトラヒ}
君喚交良比^{キミヨビヤトラヒ}

(万七・一一七七)
(万一〇・一八二二)

右のカヘラヒ・カヘセのカへの「へ」は、上代特殊仮名遣いで乙類であるが、已然形サカへの「へ」も乙類なので、仮名遣いの点からも妥当である（「左変」から導き出せる動詞サカフの活用形に関しては、「二」で触れた）。

しかも、「左変」と同様の〈借音仮名+借訓仮名〉表記には以下のような実例が（巻四にも）存する。

なづみ〈奈+積〉来し

(万二・二一三)

わびしみ〈和備+染〉せむと

(万四・六四一)

潮干のなごり〈奈+凝〉

(万六・九七六)

神さぶる〈左+振〉

(万七・一一三〇)

しなひ〈四十+搓〉にあるらむ

(万一〇・二二八四)

くくり〈久+栗〉寄せつつ

(万一一・二七九〇)

夜はすがら〈須+柄〉に

(万一三・三二七〇)

結論として、「邑礼（あるいは社）左変」は、「国こそ境へ」と訓み得る。そして、『万葉集』では、「コソ：已然形」で言い切りになる語句の多くが逆接確定条件句を構成することから、「国こそ境をつけて、隔たっているけれども」という意味になる。

六

それでは、六五五番歌を次のように訓み、一首全体の解釈を試みよう。

思はぬを思ふと言はば天地の神も知らさむ国こそ境へ

歌意は、「私があなたのことを恋しく思っていないのに、思っていると云ったならば、天地の神々もお見通しであろう。国こそ境をつけて、隔たっているけれども」となる。

多少ことばを補って、解釈するならば、「あなたと私とは互いに国が別々で離れた所に住んでいるので、あなたは私の気持ちを確かめられないかもしれないが、だからといって、私が嘘を言ったら、それぞれの国の社に神は勿論いるのだけれども、国の境を超越している天地の神々も当然お見通しのはずだから、心配する必要は全くない」という心境である。

そして、互いに離れた所に住んでいる状況は、今問題にしている六五五番歌を含む「大伴宿禰駿河麻呂の歌三首」の中の一首目で、「会わない日が続いて、一月が経ってしまいました」と歌うところから窺い知ることができる。

心には忘れぬものをたまさかに見ぬ日さまねく月そ経にける

(万四・六五三)

また、国々の社に神がいたことは、次の歌から明らかである。

国々の社の神に幣奉り我が恋すなむ妹がかなしき

(万二〇・四三九一)

七

ところで、問題の歌には類歌が二首ある。

不念乎オモハヌヲ 思常云者オモフトイハバ 大野有オホノナル 三笠社之ミカサノモリノ 神思知三カミシシラサム

(万四・五六一)

不想乎オモハヌヲ 想常云者オモフトイハバ 真鳥住マトリスム 卯名手乃社之ウナデノモリノ 神思将御知カミシシラサム

(万一二・三一〇〇)

右の二首は、「大野なる三笠みかさの社の神」とか、「真鳥住うなでむ雲梯うなでの社の神」とかのように神の所在を特定している。ところが六五五番歌では、「天地の神も」と歌う。なぜここに、「天地の神」をわざわざ登場させる必要があつたのであろうか。「天地の神」とは天神地祇の意で、『万葉集』に二〇余例見えるが、それは国などの所属を特定しない広範囲な所謂「八百万やゑももろの神々(多数神)」を指す。そのことは次の「たち」や「いづれ」の語から察することができ。

天地の大御神たち大和の大国御魂 (万五・八九四)

天地のいづれの神を祈らばか愛し母にまた言問はむ

(万二〇・四三九二)

それゆえ、たとえ国の境界があつても、それを超越し得る神々なのである。その証拠に、遠く旅に出て相手と離れ離れの状況下や、地域神のみでは安心あるいは満足できない時などに、「天地の神」は

歌われる。

天地の神も助けよ草枕旅行く君が家に至るまで

(万四・五四九)

こういった事情を考慮するならば、六五五番歌の作者が相手と国を異にしている状況は、「国こそ境へ」の句から明白である。そのため、類歌のように具体的にどこそこの国の社の神と特定して歌うことはしにくかつたと思われる。だからこそ、所属を越えた「天地の神」を登場させたのであろう。類歌二首の「神し」が、「神も」と微妙に異なっている理由も、所属の定まつた地域神を言外に暗示するための「も」であつたと考えれば、納得がいく。

これは根拠も無く、単なる想像に過ぎないが、「国こそ境へ」の句は六五五番歌と類歌の関係にある三一〇〇番歌の直前にある次の歌に、ヒントを得て作られたのかも知れない。

紫草乎ムラサキヲ 草跡別々クサトワツワツ 伏鹿之フスシカノ 野者殊異為而ノトコトニシテ 心者同ココロハオナジ

(万一二・三〇九九)

この歌は鹿に寄せる恋の歌で、「住む所は互いに別々で、離れていても心は相通じている」という趣旨である。つまり、「野は異にして」と「国こそ境へ」の両句は、「場所は離れ離れでも(相手を思う心に変わりはない)」という作者の置かれている現状を表現しており、その点で共通している。

八

最後に、「邑礼左変」という表記をとつたことについて、多少なりとも言及しておきたい。

クニの訓仮名表記は、『万葉集』では、「国」字が圧倒的に多い。しかし中には、「地（二例）」「邦（二例）」「洲（二例）」「土（二例）」「本郷（二例）」の文字で表記した例も見える。

地祇

（万五・九〇四）

邦問跡

（万九・一八〇〇）

豊洲

（万一二・三一三〇）

山跡之土丹

（万一三・三二四八、三二四九）

本郷思都追

（万一九・四一四四）

こういう例の存在から、「邑」字のみが孤立した例でないことが知られる（「邑」字をクニと訓めることは、「二」で検討済み）。

ではなぜ、「邑」字でもってクニを表記したのだろうか。それは単にクニといっても、「国家や行政区画上の国・それよりも小さい地域・生まれ故郷」などのように、クニの概念は広狭様々で、厳密には区別することが難しい場合もある。そこで、「国こそ境へ」のクニはどうかというと、おそらくこれは互いの生活の領域（二地方）としてのクニと思われる。それで、サトやムラの訓もある「邑」字を敢えてここに使ったのではないだろうか。実際、「生活の本拠となる地域」の意のサトと、ほぼ同義で使われたクニの例もある。

故去之

里尔四有者

国見跡

人毛不通

里見者

家裳荒有

（万六・一〇五九）

言繁

里尔不住者

今朝鳴之

鴈尔副而

去益物乎

一云

国尔不有者

（万八・一五一五）

もっとも、先に示したクニの中で、「本郷」と書かれたクニの例は、「生まれ故郷」の意であるから、この文字は明らかに表記者の意匠と看取すべきである。

燕来

时尔成奴等

雁之鳴者

本郷思都追

雲隠喧

（万一九・四一四四）

そして、「変」字については、サカフが、「境をつける・分け隔てる」意を表すので、「場所を変えて生活を別々にする」意を連想させる効果があると見るのは、行き過ぎであろうか。

おわりに

以上の考察の結果、六五五番歌結句「邑礼（あるいは社）左変」は、「国こそ境へ」と訓むことができ、かつ、解釈も自然で無理のないものとなるように思う。

本稿では、「礼」字のまま係助詞コソで訓む「第一の考え」と、「社↓礼」の誤字を想定した「第二の考え」を示しておいた。この二つの考え方は共に可能性のあるもので、どちらか一方に決定することはできない。ただ、「礼」字を希望の終助詞コソおよび係助詞コソで訓んだ例が、『万葉集』に全然見られないので、筆者としては、誤字説の方をいくらか支持したいと思っている。無論、誤字説が行き詰まりを打開するための窮余の策であることはよく承知している。しかし、逆の見方をするならば、一字の誤字があつたからこそ、定訓を得られないでいたのではないだろうか。

（文学部助教授）